ロイドジョンズ ローマ書講解 7·1-8·4

律法の役割と限界

ROMANS

An Exposition of Chapters 7:1-8:4

The Law: Its Functions and Limits

D. Martyn Lloyd-Jones

D・M・ロイドジョンズ［著］
渡部謙一［訳］

いのちのことば社

20 序論

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

ローマ八・一

新約聖書を最近の翻訳で読んでいる方々であれば気づく通り、そこでは省かれている、ある言葉が、一六一一年の欽定訳（ジェームズ王訳）聖書のこの節には含まれている。すなわち、「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む」という語句である。「こういうわけで、今は、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」＜英欽定訳＞。同じ語句は四節にも見られ、より古い最良の写本では、一節のこの箇所には含まれていない。それゆえ、本文批評――破壊的な高等批評ではなく健全な本文批評――に基づけば、おそらくこの特定の箇所ではこの語句を省いて、この節をこう読むのが賢明であろう。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。

今から目を向けることになるのは、この書簡の偉大な八章である。この章については、多くの人々が、単に解釈という点で一致しているばかりか、これを聖書の中でも最も偉大な章の一つであると語る点でも一致している。ある意味でそうした区別をするのは不穏当ではあるが、しかし聖書のある特定の章や箇所が、それ以外の箇所にまさって常に神の民にとって大きな意味を持ってきたことには同意せざるをえない。そこには何も悪い点はなく、ただ聖書には様々に異なる部分があるというだけの話である。使徒は、からだの中には他よりも見ばえの良い部分があると言っており「Ⅰコリ一二・二三―二四」、同じことが聖書と呼ばれる《真理》の大きな一体についても言える。そして、他の章や他の箇所を見下すようになるのでない限り、この章が傑出した章であると語ることには何の害もない。この章が最も燦然と光輝く宝石の一つであると言う人々と私は同意見である。ある人の言葉によれば、聖書全体の中でも最も光彩陸離たる光を放っている宝石、あるいは宝石の集合体は、このローマ人への手紙であり、その綺羅星のような宝石類の中でも最も輝かしい宝玉がこの章であるという。私個人としては、どうしても意見を求められるとしたら、この書簡の中で最も重要な章は五章であると言いたいが、多くの意味で最も感動的な章はこの八章である。五章と八章にはそのような順位をつけたいと思う。その理由は、この講解を進めるにつれて、おのずと明らかになるであろう。

冒頭の一言は、私たちの目をたちまち引きつける、また、私たちにとってきわめて重要なものだが、「こういうわけで」という言葉である。聖書の中で、一個の真新しい区分、真新しい章、真新しい部分を読み始めるとき、何にもまして大切なのは、問題の部分が、それ以外の部分とどのような関係にあるかを明確に理解することである。人々が聖書解釈で道を誤るのは、多くの場合、文脈に注意を払わないためである。ある一節か、ある聖句を取り上げて、その文脈を無視して解釈するほど愚かなことはない。そのようなことをすれば、好き勝手に何でも聖書に言わせることができるであろう。誤りを防ぐ一つの道は、常に文脈を考察することである。さて、この点が個々の節と節について真実だとしたら、章と章についても等しく真実である。そしてローマ人への手紙のこの八章については、ことのほか真実である。この章は、どのような文脈の中に置かれているだろうか。「こういうわけで」という言葉に着目すれば、すぐさま正しい方向に向かうことができる。これは、前段とつながる言葉である。使徒は、先に語った内容をもとにして、一個の推論、一個の考えられる結論を引き出そうとしている。だから、まずこの用語が正確には何を指しているのかを突きとめなくてはならない。「〈こういうわけで〉、今は……」。すでに使徒が語った内容に照らすとき、この言葉はどのように解釈すべきだろうか。

これは興味深い問題である。この言葉が、七章最後でパウロが語ったばかりの内容とつながっていないという点を指摘することに長々と時間をかける必要はない。この件については、幸いなことに最良の注解者たちがほとんどみな一致している。例えば、チャールズ・ホッジはきっぱりこう明言している。パウロが八章冒頭のこの箇所で語っている内容、また、この章を通じてこれから語っていく内

容は、七章をもとにして引き出した推論ではなく、わけても七章一四―二五節から引き出した推論ではないと。パウロがいま語ったばかりの内容から考えられる結論として、このように言うことはできない。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。そこには何一つ自然なつながりはない。この言明と唯一自然につながっているのは、先にも口を酸っぱくして強調したように、五章最後に見られる言葉である。八章一節のこの言明は、パウロが六章および七章で語っていたどのような内容とも自然にはつながらない。しかし、使徒が五章最後で語っていた言葉、実際、五章の全体とは、きわめて自然に結びつくのである。

五章冒頭では、これと良く似た別の言葉、「ですから」が述べられていた。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」。そして、さらに考えられる結論がこう引き出されていた。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます」。言葉を換えると、義認という偉大な教理を規定し、様々な難点や反論に対して弁明し、そのすべての際立った例証としてアブラハムを用いた上で、使徒はこう言うのである。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは……神との平和を持っています」。さて、実は八章冒頭でパウロはほぼ同じことを再び語っている。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。言葉を換えると、私たちは「神との平和」の中にあるのである。私た

ちは神の御怒りの下にはおらず、決して罪に定められることがない。それゆえ、ここでパウロは、五章で語っていた内容を取り上げているのだと論じたい。パウロは、五章の一節と二節という大本の命題を、その章の残りの部分で解き明かし、こう言明してしめくくっていた。「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです」[ロマ五・二一]。五章を取り扱った際に大いに強調した通り、この五章が最大の力点を置いて教えているのは、信仰によって義と認められたすべての者が完全に、また最終的に救われることになるのは絶対に確実だという真理である。人は、ひとたび信仰によって義と認められたなら、ある意味で、すでに栄化されていると言える。――「私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます」(二節)。試練も苦難も艱難(かんなん)も、私たちから救いを奪うことはできない。私たちの義認は、私たちに対する神の愛から生じているからである。

次に使徒は、キリストと私たちの結合という素晴らしい教理によって、同じ題目をさらに詳細に解き明かしている。特にこの点を扱っているのが、五章の一二―二一節である。この八章一節で、パウロはそこに立ち戻っていると言いたい。なぜ私はこのように言い表わそうとするのだろうか。それは、六章と七章が実は挿入句的な部分でしかないという事実を、もう一度思い起こさせるためである。この二つの章は、この大議論の本筋には関わっていない。たとい六章と七章が省かれていたとしても、パウロの根本的な使信は、事の鍵をにぎる部分を全く何も失わなかったであろう。しかし、こ

の二つの章の双方で見た通り、わざわざパウロは脇道にそれ、特定の難点を取り扱い、自分の教えに対して持ち出されていた特定の批判と反論に答えるのである。私たちは、こうした大筋の議論、大きな原則のことを明確に理解しなくてはならない。人はそれを怠るからこそ、この偉大な書簡について道を誤り、害をこうむり、救いの喜びを味わえなくなる。そして結局、「木を見て森を見ず」の状態に陥るのである。だから、ここでもう一度「森」を眺めなくてはならない。六章が証明しているのは、五章一二―二一節で解き明かされたキリストと私たちの結合のおかげで、私たちの聖化が確実なものとされているという真理である。実は七章は、それと全く同じ点を異なる形で証明しているにすぎない。七章でパウロが証明しようと心を砕いているのも、私たちの聖化が確実にされているという点である。それは、私たちが《律法》から自由にされて、主イエス・キリストとつなぎ合わされ、結ばれたからである。あるいは、少し違う言い方にすると、六章の務めは、キリストと私たちが結合しているおかげで、肯定的にはどのような結果が生じるのか――現時点でどのような状態が生じており、やがてどのような状態がもたらされるか――を示すことにある。七章が主たる関心を寄せるのは、《律法》には何ができないかを示すことであり、六章が主たる関心を寄せるのは、キリストには何がおできになるかを示すことである。これまで私たちは、それが七章の唯一の務めであり、他の何ものでもないことを示そうとしてきた。七章は脇筋（わきすじ）でしかなく、その点をはっきり理解していない人々にこう証明するための挿入句的な存在でしかない。信仰者は、義認や聖化という見地から《律法》や《律

法》を遵守することについて考えるのを一切やめなくてはならないのだと。とりわけ七章一四―二五節は、その点を証明することに充（あ）てられており、その議論の究極において、パウロはこう示している。《律法》が霊的なものであると悟っていながら、《律法》から解放される道を悟っていない者は、全く何の望みもない状態に陥るしかないのだ。先に七章の最後で述べた通り、一四―二五節で描き出されている人物とは、自分が《律法》によって罪に定められていることしか悟っていない人である。その人は、《律法》と、自分がその《律法》に対してどのような関係にあるかという見地からしか、ものを考えられない。先に私たちは七章のことを、使徒がひとりの人物の姿を仮定し、想像し、描き出している箇所でしかないと論じた。この人物は《律法》によって救われようとすることがどれほど完全に絶望的な試みであるかを悟っている。さもなければ、ここで描き出されているのは、罪を極度に深く確信させられている、現実の人物であると言っても良いであろう。ジョン・バニヤンの『溢（あふ）るる恩寵』には、この点をまさに彷彿（ほうふつ）させる姿が記されているのではないかと思う。バニヤンは、十八箇月ものあいだ罪の確信と悔い改めの中でうめき苦しんだ。《律法》が霊的なものであることは悟ったが、福音の完全な使信は悟っていなかった。内側における聖霊の働きによって、律法の性格と、自分自身に関する真理は理解するようになっていたが、それ以上は何も理解していなかった。解放される道、逃れの道を悟っていなかった。そのような人は、どのような立場に置かれるだろうか。先に述べた通り、こう答えたいと思う。そのような人は、いのちを宿している。いのちを全く宿していない

「生まれながらの」人間［Ⅰコリ二・一四］でしかなかったとしたら、《律法》が霊的なものであるとは理解できなかったであろう。新生は意識的な経験ではない。無意識の領域で起こることである。私たちに霊的ないのちの種を植えつけてくださる神の行動である。そして、そうしたいのちの存在を最初に指し示すしるしこそ、そこに生じる悔い改めにほかならない。どのような人も、神のお働きを受けずに悔い改めることはできない。生まれながらの人間は決して悔い改めることができない。こうした事がらは「彼には愚かなことだから」である（Ⅰコリ二・一四）。しかし人は、そのように罪を確信させられ、罪に定められた状態のまま一定の期間を過ごした後で初めて、救いの道を見いだすことがありえる。とはいえ、悔い改めと信仰の正確な関係は難しい問題である。

今しがたジョン・バニヤンの例を引いたが、《教会》の歴史に起こった様々な《信仰復興》の模様について良く知っている方々は、そうした時期に同じ種類の現象がたびたび起こっていたことに思い当たるであろう。例えば、一六三〇年にスコットランドのカーク・オブ・ショッツで起きた大事件を取り上げてみるがいい。あの有名な月曜日午前にジョン・リヴィングストンが語った説教の結果、罪を確信させられた人々の多くが経験した苦悶（くもん）は、まさにローマ書七章後半で描き出されている様相そのものであった。そうした状態のまま何時間も過ごした者もあれば、何日間も、何週間も過ごした者もいた。この人々は、全く身の破滅だと感じた。《律法》が霊的なものであると悟り、自分自身が全くの失敗者であること、自分自身の努力がまるで無益であることを悟った。何の解放も安らぎも見い

だすことができなかった。その状態のまま、ある者はうめき、ある者は生垣（いけがき）の下に文字通り身を投げ出し、また他の者らは朝まだきに教役者の家の扉を叩いては、自分が見いだすことのできなかった安らぎを叫び求めた。これこそ、ローマ七・一三―二五で使徒パウロが完璧に描き出している立場のように思われる。これは、霊的ないのちのごく初期段階における表われであるが、それ以上のものではない。――罪の確信ではあっても、回心ではない。[1]

使徒が今この八章で語り進めていく内容を見れば、これまで私が示唆してきた考えだけが、この箇所に関する唯一筋の通った適切な見解であることが、きわめて明白に証明されていると思われる。なぜなら、今やここでパウロは、キリスト者が自分をどのような者と考えているか、また、キリスト者が本当は自分について何が真実であると知っているかという点を、真に示していくことになるからである。そして、パウロが強調することになるのは、キリスト者とは、神の《律法》のことだけ話している人間ではないということである。キリスト者は、自分の罪や失敗について話をするとき、決して第一義的には《律法》という見地から話をしない。愛という見地から話をし、自分のために死んでくださった《お方》を喜ばせることができなかったこと、また、その《お方》のご栄光のために生きら

（1）付録、六六七頁をも参照。

れなかったことについて話をする。キリスト者は、ローマ七章のように、《律法》の見地から長々と話をひきずりはしない。もはや「律法の下に」はなく、「恵みの下に」ある［ローマ六・一四］。そればかりか、いずれ使徒が示すことになるように、――実際、すでに冒頭からここで宣言しているように、――キリスト者は決して、自分が《律法》によって罪に定められていると感じさせられてはならない。感じさせられているとしたら、自分をたしなめるべきである。この偉大な八章の全目標は、こう強調することにある。――「罪に定められることは決してありません。……引き離すことはできません」［ローマ八・一、三九］。キリスト者は、決して自分のことを七章一四―二五節の見地から語るべきではない。それは「律法の下に」ある態度、「罪に定められ」ている態度である。ここで使徒は、まことに並外れた、感動的な言葉遣いでこう語っている。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。これこそ福音の栄光である。パウロがこの書簡を書き記しているのは、その真理を示すためである。この章で真っ先に用いられている、「こういうわけで」という言葉そのものからして、パウロが五章で語っていた内容に立ち戻り、その教えを再び取り上げているという証拠である。この言葉は、七章の最後とは、決してそのまま直（じか）につながってはおらず、決してそこから直接に考えられる結論を引き出したものではない。この事実は、六章と七章をただの挿入句的な部分と見なさなくてはならないという、さらなる証明である。この二つの章は、使徒がキリスト教の救いの道を講解する途中に差し挟（はさ）んだものにすぎない。さて、今や私たちは、この八

章で、どのようにその救いの講解がさらに進められているかを眺めることに向かって良いであろう。

あらかじめ全体を見渡して、大摑（づか）みに眺めておこう。この箇所について即座に言えることがいくつかある。私が最初に述べるこの言明には、ぎょっとする人がいるかもしれない。八章に新しいものはほとんどない。本質的に新しいものは全くない。この章では、何の新しい経験も説明されておらず、これまで身を置いていた立場から突如として変化するようなものは何も描写されていない。すでに語ったように、この章は前の方の五章とつながっている。だから、「七章にいた」人が「八章に切り替わる」などいう考え方を正当化する言明を使徒は全く述べていない。決してここでは、今まで語られていなかったものが突如として持ち出されてはいない。この章の中にあるあらゆるものは、すでにそれとなく指し示されていた。この箇所は、パウロがすでに萌芽や胚子として言明していたものを解き明かし、講解し、さらに詳しく述べているのである。だからこそ、やはり五章は、この書簡の根幹を成す偉大な章だと言いたいのである。この八章でパウロは、かつて五章で大原則として語ったことを取り上げて、入念に解き明かしている。これまで何度となく見てきたように、それがパウロの論法である。五章は、それまでに語られた内容すべてをまとめ上げている。また、後に続く内容すべてを導き入れている。この八章には、数多くの感動的な言明が見いだされるであろう。だが、新しい真理は何一つない。この箇所は、純然たる講解にすぎない。それでは、この章の内容を概括的に分析してみよう。

あえて大胆に主張すれば、八章の骨格となる本題は、聖化ではない。聖化は、その一部でしかない。この章の骨格となる本題は、キリスト者がどれほど安泰な状態にあるか、聖徒の「最終的堅忍」がどれほど揺るぎないものか、そして、主イエス・キリストを信じるすべての者がどれほど究極的に、完全に、全く救われることになるかである。しかし、この真理には以前にも出会ったことがあった。それは五章に見いだされる。五章を最初に扱った際に、私は同じ言葉を用いた。「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます」［ロマ五・一―二］。五章冒頭は、すでに最後の来たるべき栄光について言及している。キリスト者が究極的、最終的に受けることになる完全な救いが、どれほど確実で、揺るぎなく、絶対的に保証されているかを教えている。何事もその救いを妨げたり挫折させたりできないと示している。さて、それこそ五章と同じく八章の本題である。

この本題を扱うに当たり、またもや使徒は、いかにもこの人物らしいことを行なう。偉大さを真に示す純良なしるしは、単純さである。複雑にからみ合い混乱しているのは卑小な精神である。この人物の論法は常に同じであり、本質的に単純である。一節でパウロは自分の本題を述べ、キリスト者について何が真実であるかを概括的に言明する。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。この章でその後に続く三八個の節は、この冒頭の主張

を解き明かしたものでしかない。パウロはすでに同じ申し立てを五章で行なっていた。「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです」（二〇節、二一節）。そこからパウロは、直ちにこの八章で語る内容に話を進めても良かったであろうが、二つの大きな困難に気づいていたために、それを六章と七章で取り扱う。しかしながら、その二つの章を書いたことは時間の無駄ではなかった。この六章と七章があるために、パウロはすでに語ったことを、もう一度より力強く語れるようになったのである。すでに困難は取り除いたので、以前にもまさる力を込めて、救いの確信に関するこの壮大で中心的な言明を強調し、打ち出すことができるのである。だから私たちは、六章と七章における脇道のことを神に感謝したい。この二つの章を筋違いな形で持ち上げはしないが、今やそれらが何のためにあったかは、はっきり分かる。

根本的な命題はこうである。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。今から使徒はこの命題を解き明かし、証明しようとしている。二―四節では、これを次のような筋道で証明する。パウロによると、この言葉が真実なのは、私たちが《律法》から完全に解放されて、聖霊によってキリストに結び合わされているからである。パウロは、梯子を昇るかのように、この点を一歩また一歩と解き明かす。第一の点は、キリスト者が「罪に定めら

れることは決してない」ということである。しかしある人は、「《律法》についてはどうなのです？」と言うであろう。「私たちは、もはや《律法》とは無関係なのだ」とパウロは答える。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」［二節］。それからパウロは、《律法》にはできなくなっていたことが、どのようにキリストにあって行なわれたかを語ることに進む。これが第一の議論である。

第二の議論は、五―一三節に見られる。パウロはすでに七章六節で聖霊に言及していた。そして、今やその言明をさらに詳しく述べることに進む。パウロによると、私たちの救いが確実にされているのは、私たちの内側で聖霊が働いておられるからである。聖霊は私たちの中で大きく二つのことを行なってくださる。最初に行なわれるのは、私たちの聖化である。御霊は私たちを罪とその一切の痕跡から解放し、からださえ、そこから解放してくださる。六章における脇道で見た通り、罪はからだの中にとどまっている。よろしい。それすらも消え去るのだとパウロは言う。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです」（一一節）。

第三の議論は、一四―一七節に見られる。そこで使徒は、やはりこう教えている。私たちの内側における御霊の臨在は、私たちが神の子どもたち、神の子らである証拠なのだ。私たちは単に、神から

赦されはしたものの、今なお「律法の下に」ある臣下のように扱われ続ける立場にとどめられてはいない。否、とパウロは言う。この栄光に富む救いにおいて、私たちはその領域から全く引き上げられているのだ。「子とされ」ているのだ。神の子らとなり、神の子どもたちとなっており、それゆえに、「神の相続人であり、キリストとの共同相続人」なのだ［一七節］。救いは、このような見方で眺めるべきである。私たちは、自分が子らとなっていることを悟らなくてはならない。そして、もし神が私たちにそのようなみわざを行ない、私たちの関係全体を変え、それに伴う一切のものを与えてくださったとしたら、どのようにして私たちの救いが立ち消えになることなどありえるだろうか。それが一四―一七節の議論である。

第四の議論は、一八―二五節にあり、ここでパウロはこう論じている。私たちは、子らであるからには、栄光の御国を受け継ぐ運命にある。その御国は、単に神が私たちに約束してくださったというだけでなく、今も神が私たちのために用意しつつあるものであり、私たちのためばかりでなく、被造世界全体のため用意しておられるものなのである。これは途方もない言明である。私たちの中にいるきわめて多くの人々の根本的な欠点は、あまりにも主観的にすぎて、四六時中自分の特定の気分や状態について考えている点にある。使徒パウロが私たちに思い起こさせているところ、罪は単に私たちと私たちの同胞である人間に影響を及ぼしただけでなく、被造世界全体に影響を及ぼした。――動物たちも、自然界の無生物すらも、何もかもが影響された。神の作品、神の被造世界は台無しにされ

た。罪が入り込み、悪がすべてを汚染した。私たちは、宇宙全体を新たによみがえらせようとしている、この栄光に富む構想の一部分として、救いを、また私たち自身を眺めるべきである。そして神は、全宇宙に対してこのことを行なおうとしている以上、あなたに対しても行なおうとしておられるのである！

［第五に］二六節と二七節で使徒は、私たちの水準に降りてきて、ずっと身近で実際的になり、こう私たちに思い起こさせる。たとい私たちがこの世におり、その困難や問題や戦いに取り巻かれていようと、その間も神は私たちが孤立しないように取り計らっておられる。聖霊がとりなし手として私たちの内側で働き、祈りをささげ、祈り方を私たちに教え、祈りに向かうよう促し、私たちの必要を示し、その必要を満たすことのできる備えを思い出させ、時には私たちが理解できないような形で、私たちの内側で祈りすらささげ、私たち自身も時として理解できないような、だが神には理解できる声を発させてくださる。何事も私たちを神から引き離すことはできない。私たちはキリスト・イエスにある。そして、この交わりは常に保たれることになっている。

それからパウロは第六の議論に進む。それが二八―三四節である。これは、何にもまして偉大な議論の一つである。なぜ私は、これほどの自信と確信をもって、キリスト者が最終的に全く救われることになるのは確実だと語れるのか。その答えは、その一切が、神のご面目そのものに関わっているからである。もしもこの救いが頓挫するとしたら、――もし信仰者がひとりでも挫折するようなことが

あるとしたら、――神の面目は丸潰れになる。どういうことか説明しよう。神は、救いという一個の偉大な計画と構想と目的を持っていると、全くあからさまに私たちにお告げになった。世界の基の置かれる前から、神はその救いを形作り、計画された。そこには様々な過程と段階があり、神はその一つ一つの意味をお告げになった。神は永遠の昔から私たちを心にかけ、私たちを予定された。それから私たちを召し出し、取り分け、義認から最終的な栄化に至る、あらゆる過程と段階を通じて私たちの内側でそのみわざを続けておられる。それが、神が宣告された救いの計画であり構想である。神がその計画をお立てになったのは、人間が罪を犯す前はおろか、人間が創造されもしない時期からであった。神はその計画を宣告し、公布しておられる。その計画は、神が神であられるために、また、神の目的が常に確実であるために、失敗することがありえない。

しかし、［第七に］使徒はこの区分でそれよりさらに進んだことを私たちに告げる。パウロは、単に神が何を目当てとし、計画し、実行に移されたか告げるだけではない。その計画に関して神がすでにどのような事がらを具体的に行なわれたかを特に強調する。ここでパウロは、何にもまして傑出した、驚くべき事実を語る。神は、この偉大な計画を実現するために、ご自分のひとり子をさえ「惜しまずに」、「私たちすべてのために……死に渡された」［三二節］。使徒は言う。これこそ、残りすべてが後に続くことになるという絶対的な保証なのだ。この不変で、永遠で、聖にして義なる神、あらゆる力をお持ちの神が、ご自分の御子を私たちと私たちの救いのために死に引き渡しながら、何事かに

よってその救いが立ち往生し、挫折するままにされるなど考えられないことだ。思いもよらないことだ。単にそこに神のご面目があり、神のことばがあり、神の立てたご計画があるばかりではない。神は行動してくださった。神はご自分の愛するひとり子をこの世に遣わし、故意に死に引き渡し、罪を負わせ、「神の《小羊》」とされた。御子の死は、不慮の事故ではなかった。第一義的には人間たちの行動ではなかった。ペンテコステの日にエルサレムで語ったその説教でペテロが宣言したように、「神の定めた計画と神の予知とによって」行なわれたことであった（使二・二三）。神は、私たちを救うために、ご自分の御子の死を計画された。神がそこまでしながら、何事かによってその救いが失敗するのをお許しになるなどということが考えられるだろうか。そのようなことは箸にも棒にもかからない愚論である。私たちの救いは揺るがない。パウロがこう言い表わす通りである。「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」［二九―三〇節］。絶対に揺るぎはない！「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」［三一節］。そして、そのようにパウロは自分の議論を解き明かし、三四節で完結する。

こうしたすべてを語った上で、使徒は一切合財を三五―三九節でまとめ上げる。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか」［三五節］。パウロはすでに第一節で、何者も、また何事もそうすることはできないと言っていた。キリスト者は決して罪に定められることがない。決して罪に定められることはありえない。さてパウロはその点を証明し終えた。だから、しめくくりにこう尋ねる。それでは、何者が私たちをキリストの愛から引き離すことがあり、引き離す力を持っているなどと考えられるのか。そして、一個の強大で感動的な絶頂において、何事にもそれは不可能だと示すことに進む。「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」［三八―三九節］。これが究極的な保証である。――神の偉大さでも大能でも御力でもなく、神のご計画や目的でさえない。最終的な根拠は、神の愛である。神の愛こそ、それ以外のこうしたすべてを引き起こしたものである。「神は愛だからです」［Ⅰヨハ四・八］。そして、神は変わることがありえないため、何事も「主に御目的（はかりごと）捨てさせえず」、その栄光に富むご計画を挫折させることはできない。このようにして使徒は、第一節で一個の命題として規定した真理を、二節から三九節に至るこうした節によって証明し、立証し、確立するのである。

これから私たちは、この箇所を一歩一歩、その言明ごとに解き明かしていかなくてはならない。繰り返すが、使徒は五章の偉大な題目を再び取り上げている。すなわち、信仰によって義と認められた者はみな、絶対に揺るぎなくその究極的な栄化に至り、完全な解放と自由と救いに至るのである。義

D・M・ロイドジョンズ

1899年、南ウェールズ生まれ。ロンドンの聖バーソロミュー病院付属医学校を卒業後、内科医として働きながら、高名な宮廷侍医ホーダー卿の主任臨床助手を勤める。1927年、医者の職を辞し、南ウェールズのアベラヴォンはウェールズ長老派の一教会の教役者となる。同地で1938年まで伝道と牧会の任に当たった後、ロンドンに移り、バッキンガムゲイトにあるウェストミンスター・チャペルで、故G・キャンベル・モルガン博士の協力牧師となる。1943年に同博士が引退してから主任牧師となり、30年間の伝道牧会活動を行なった後で、1968年に引退。各地における説教奉仕と積極的な執筆活動に携わった。1981年に死去。

主な著書としては、『人間の苦境と神の力』（未訳）、『山上の説教』、『霊的スランプ』、『試練の中の信仰』（以上、聖書図書刊行会刊）、『教会の権威』（みくに書店刊）、『変わらざる真理』（未訳）、『説教と説教者』（いのちのことば社刊）、『清教徒たち』（未訳）、『伝道説教集』（未訳）のほかに、ローマ書講解シリーズおよびエペソ書講解シリーズなどがある。

認を終着駅にすることはできない。また、まず人は「自分の義認を取ります。それからそこで、いったん立ち止まり、停止します。その後で、自分の聖化を取る決心をするのです」などと言う者たちは、ローマ人への手紙の中心的な題目を否定しているのである。人は「義と認められ」ているとしたら、最終的に「栄化」されることは確実にされている。聖化は、その一つの段階だが、数ある段階の一つでしかない。聖化が八章でどのような地位を占めているか注意するがいい。たった一つの区分だけであり、その前後には、他の区分があるのである。このようにして、あらゆる点で使徒は自分のこの論点を立証している。「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。こうした様々な題目を取り上げ、個々の言明を具体的に眺めていくにつれて、こう示すことは容易になるであろう。パウロは単に、すでに五章で萌芽の形において、また基本的な原則として語っていた内容を、さらに詳しく述べているにすぎないのだと。